

# 成果報告書

記入日 2023 年 10 月 10 日

フリガナ：( コンドウ カナ ) 氏 名： 金堂 奏	渡航先国名 南アフリカ共和国	留学先の所属機関：ウィットワータースランド大学 帰国後の所属機関：一橋大学
研究テーマ：歴史記念館が形作るソウェト蜂起の記念空間—地域住民とのかかわりから—		
研究期間：2021 年 6 月～2023 年 5 月(2 年 0 ヶ月)		
研究成果(概要) 南アフリカ共和国ヨハネスブルグ市のソウェトにて、1976 年に発生した事件ソウェト蜂起に関してどのような形で記念が行われているのかを歴史記念館、およびソウェト内の学校を事例に参与観察し、ローカル、ナショナルなレベルでの歴史の語られ方、また世代間継承の実態についても明らかにした。		
研究成果(詳細) <b>【研究の背景・特徴】</b> 南アフリカ共和国(以下、南ア)では 1994 年の民主化以降、アパルトヘイトの記憶をどのように国民で共有し後の世代に伝えていくのが大きな課題となってきた。特に反アパルトヘイト運動の記憶継承は、それまで長年にわたり人権侵害と闘ってきた多くの黒人の人々の尊厳を取り戻すための取り組みとして新政府から重視され、記念日の制定、記念碑・記念館の設置、歴史教科書の作り直しなどがなされてきた。1976 年にヨハネスブルグ市南西部の黒人居住地区ソウェトで発生したソウェト蜂起の記憶もその 1 つに含まれる。当時の人種差別的な教育政策、特に抑圧者の母語であるアフリカーンス語の使用を強制した政府に対して子供たちがデモをしたところ警官から銃撃され多くの人々が殺害された事件である。多くの子供が犠牲になった事、この蜂起が国内他地域にも伝播して最終的に全国規模の運動になりアパルトヘイト政権の転覆にもつながった事から現在学校の社会科・歴史の教科書にも記載されているほか、事件発生日の 6 月 16 日は Youth Day として国の祝日に制定されている。 先行研究では当時ソウェト蜂起に参加していた活動家ら(現在は大学所属の研究者たち)が中心となって自分たち自身の記憶としてソウェト蜂起をどのように記録して残してゆくのかという事がさかんに議論されてきた。一方で、彼らが記録していく記憶が現在果たして誰によって誰に対してどのように伝えられているのかという実態はその研究の範疇にまだ含まれていなかった。それは現在当事者世代が健在であるという理由が大きい、事件の発生から既に 45 年以上が経過しソウェト蜂起ひいてはアパルトヘイト自体も実体験として知らない世代の人数が増えている現状も踏まえて、本研究は文書やアーカイブなどの史料に残す「実践」とは別の形の「実践」として、ソウェト蜂起を記念したヘクター・ピーターソン記念館およびソウェト内にある学校で行われる記憶継承の考察・検討を試みた。加えて、ソウェト蜂起当事者世代と蜂起およびアパルトヘイト自体を経験していない世代が同じ空間に暮らしている現状だからこそ垣間見ることができる問題にも注目し、本研究の独自性として位置づけた。		

**【調査項目と方法】**

本研究では、ソウェト蜂起が発生した現場ソウェトにて、事件から45年余り経過した現在、記憶継承が誰によってどのように行われているのかを明らかにすることを大きな課題とした。それにより、これまで先行研究で議論されてきた記憶継承をより多角的に捉え、今後ソウェト蜂起に関する記憶継承がその行為に内包している「記録すること」「伝えること」という2つの営みをより連動させる形で発展するための一助とすることを最終的な目標とした。方法としては①史資料収集②参与観察③インタビューを用いた。史資料収集ではこれまでに収集されアーカイブに保存されているオーラル・ヒストリー群などを集めた。参与観察では、歴史記念館に日々誰が訪れどのような経験がされているのか、ソウェト内の学校の歴史の授業で何がどのように教えられているのかなどを観察した。インタビュー調査では、記念館の名前になっているヘクター・ピーターソンの姉で現在語り部をしているアントワネット・シトーレ氏、ソウェト蜂起当事者であり現在歴史学者になっている人物数名、当時デモを率いた活動家の1人セス・マジブコ氏、現在記念館で語り部をしている職員らに話を聞くことができた。

**【研究成果】****1. 当時の学生たちのオーラル・ヒストリー**

留学先の大学にあるアーカイブ、ヒストリカル・ペーパーズにはソウェト蜂起に参加した学生たちのオーラル・ヒストリーが保存されていたため収集した。それらは当時デモを率いた学生組織 SASM などに所属していた学生活動家たちの証言であり、彼らが自分たちの上の世代の活動家たちと交流し、闘う術を身に着けながらどのようにして抵抗運動を進めていったのかが記され、当時の子供たちが上の世代と断絶・対立しており自分たちで行動を起こしたのだというこれまでに見られた一部の言説を反証する貴重な史料であった。しかし一方で、それらのほぼ全ての語り手が男性であることが分かった。現状残されているオーラル・ヒストリーにはかなりジェンダーの偏りがあることが明らかになっている。女性の口から語られたソウェト蜂起の記録はまだまだ数が多くなく、まとめられた学術書も数冊しか存在していない。当時ソウェトに暮らす女性たちは、人種に加え性別の違いによって二重に抑圧される立場に置かれていたと言われている。この問題は、報告者が留学中所属していた研究センター、ヒストリー・ワークショップの今後の課題でもあるようだ。草の根の人々の歴史を収集し記録する事を活動の主目的とするこの研究センターは2023年よりソウェトの地域史を記録しアーカイブを作る研究プロジェクトを開始したところであり、今後報告者もそのメンバーとして活動することとなっている。

**2. ソウェト蜂起当事者であり歴史学者である人々の語り**

本研究の大きな収穫として、自身もソウェト蜂起の経験者であり現在は大学所属の歴史学者になっている人々へ行ったインタビューも挙げる事ができる。計2名の研究者のライフストーリーを聞き取り、彼らがどのような人生を送り研究者となり歴史を記録するようになったのかを明らかにすることができた。特に注目すべき点は、彼らの人生が現在の研究と地続きであり、大きな使命感の下で活動していることである。彼らの持つ自分たちの生きてきた証、また反アパルトヘイト闘争のさなかで命を落とした仲間たちの存在した証を残りの人生をかけて残すのだという熱意に圧倒された。ここに、人はなぜ人権侵害にまつわる記憶継承のために突き動かされるのかを知るためのヒントがある。

**3. 地元の学校と記念館の断絶、記憶継承の困難さ**

ヘクター・ピーターソン記念館での長期にわたる参与観察の結果、日々この場所を訪れるのは海外から

の観光客とソウエトの外から校外学習で来る生徒たちであり、一方でソウエト内の学校が利用する頻度はソウエト外の学校と比べて少ない事が明らかになった。ソウエト蜂起に参加した生徒たちが通っていた学校 8 校に報告者が聞き取りをした所、2022 年に記念館を歴史教育に利用した学校は 1 校もなかった（ただし、行く予定だったがトラブルにより直前にキャンセルになった学校が 1 校あり）。その内 1 校の歴史教員の話によると、以前は生徒を連れて行っていたがコロナ禍によって校外学習の手続きが煩雑になった事と、生徒の親から「既に知っている事について学ぶために入館料を払って子供を行かせたくない」という苦情があった事が要因でやめてしまったという。この点は、現在記念館と地元の学校の間にある断絶について、生徒たちの親世代の持つ歴史認識も要因として検討する必要があることを示している。また、報告者はこれら 8 つの学校で歴史の授業も観察した。教員は 1976 年の当事者世代から 20 代までと様々で、授業の進め方も学校によって異なっていた。教科書を読み上げるだけの教員もいれば、追加で史料を用いる教員、グループディスカッションやエッセイを課す教員などがあり、統一されていない様子であった。加えて、驚いた事に 8 校のうち数校、特に記念館から数分の所に位置する学校の教員はシトーレ氏が存命である事を知らなかった。この現状は記念館館長にも伝えており、報告者も今後調査を続ける予定である。

#### 4. 景観として残る歴史

申請者はヨハネスブルグ中心部に住みソウエトへ通いで調査をしていたがその際に今もなおアパートヘイトの痕跡が街並みにあるのをまざまざと感じた。人種隔離政策によって多くの黒人が強制移住させられてできたソウエトはヨハネスブルグ中心部から 25km も離れた場所にあり、多くの住民が車や乗り合いタクシーなどで日々時間をかけて都心へ通勤している。マッチ箱とも呼ばれるレンガ造りの平屋が密集して立ち並び、コンテナを利用して作られた売店や酒屋は常に音楽と人々の笑い声に包まれ非常に活気に満ちているが、現在も貧困問題などが深刻な場所でもある。この地に日々やって来る観光客は歴史を知るための非日常的な空間としてソウエトを経験した自分たちの場所へと帰っていくが、住民にとっては日常生活を送る空間であり彼らは今もアパートヘイトの過去との連続性の中に生きている。彼らにとっては決して終わった出来事ではないのである。2 のインタビューで「黒人がソウエトの外へ引っ越すことはあっても白人がソウエトへ越してくることはない」という発言もあり、それはこの国に残る問題を表している。

#### 5. 語りの力と世代交代

今回の調査で最も印象深かったのが語り部の方々へのインタビューである。シトーレ氏、マジブコ氏の両名とも普段は朗らかな人柄であるがソウエト蜂起当時の語りが始まると口調も表情も一変した。おそらく何十回と繰り返し語ってきた内容であろうが、それでも今初めて話しているかのような、そしてこちらに当時の状況を想像させる迫力があつた。今では語り部も世代交代が起こっており、当時を直接は知らない 20 代・30 代の人々も記念館周辺で語り部をしているが、来訪者は真剣な表情で聞き入り、驚き悲しんでいる。その様子からは語りという営みの持つ可能性が感じられた。壮絶な経験は当人にしか語り得ない部分もあるが、一方で同じ物語を当人以外が語ったとしても物語の持つメッセージ性は損なわれないのではないか。これは例えば日本の戦争体験に関する語り部の世代交代の話にも通ずる点であるだろう。一方で、ソウエト内の語り部を生業とする人々を除く多くの若者たちが現在ソウエトの歴史をほとんど知らず興味も持たないという問題もマジブコ氏から聞かれたため、今後はアパートヘイト終焉以後に生まれた世代の歴史認識やアイデンティティなどを探り、現状の要因を検討することを新たな課題としたい。

## 留学中の生活・研究でのトピックス

### (1) ヨハネスブルグの暮らし

留学中はヨハネスブルグ市のメルビルという、所属先の大学からほど近いエリアに居住した。ヨハネスブルグは危険な都市という事で世界的に知られており、実際に近所で強盗や殺人事件はあったのだが報告者は幸いにもそのような犯罪の被害に遭う事はなかった。これは単に運が良かっただけと言えるかもしれないが、ヨハネスブルグに暮らす人々はなるべく危険な目に遭わないようにする術を熟知しており、報告者もそれに従って生活していたという点が大きい。ヨハネスブルグの「危険な都市」というイメージはしばしば独り歩きをしまるで街中に犯罪者ばかりいるかのような認識を広めているが、そこには治安や貧困などの社会問題と日々対峙しながらも楽しく懸命に生きる人々がいる事を忘れてはならない。

### (2) 新型コロナウイルスへの感染

報告者の研究はインタビューと参与観察が中心であり常に人に囲まれている状態であったため、2年間の留学中に3回新型コロナウイルスに感染した。南ア国家が提供するワクチンを現地で接種済みであったとはいえ症状は辛く、母国から遠く離れた地での闘病はかなり堪えた。このまま孤独死するのではないかと大きな不安にも駆られたが、居住していたコテージの大家や近所の友人など周りの人々に助けられた。特に同じ敷地内に暮らしていた友人にはコロナに感染するたびに食料などを差し入れしてもらった。心から感謝している。

### (3) ハラスメント被害

報告者はソウエトでのフィールドワーク中、調査協力者やその他住民から頻繁にセクシャルハラスメントの被害を受けた。女性やその他の性的マイノリティへの差別、ハラスメント、暴力事件が絶えないこの国で、報告者は女性かつ外国人であることから余計に目立ってしまい好奇の目にさらされることが多かったように思う。今回の留学でこうした問題の深刻さについて身をもって実感した。特に、信頼していた調査協力者から被害に遭った際には精神的にかなり消耗したが、そのような時に相談に乗ってくれ、また時には横で守ってくれた現地の指導教官とソウエトの女性たちには感謝してもしきれない。

## 今後の社会貢献

本研究の課題「過去の人権侵害の記憶を誰がどのように伝えていくのか」はある程度の普遍性を持っており、ドイツや日本を含め様々な地域で取り組まれている。むろんこの問題を過度に一般化してしまうと各事例の詳細がないがしろにしてしまう危険性があるが、今回の調査中にはこうした人権侵害にまつわる記念にはやはり共通の課題があるように感じられた。中でも大きな論点として浮かび上がった記念における世代交代は、第二次世界大戦の記憶継承に関する事例でも長年議論されてきたものである。その他にもあるローカルな歴史的イベントがナショナルな物語としてどのように昇華するのか、そこに政府がどのような目的をもって介入し結果として何が忘却されるのかといった問題もある。特に現在若者の歴史離れが深刻で地域の歴史が住民の間で忘却されつつあるというソウエトに見られる問題は他事例にも共通するものと思われる。記念は過去の出来事について行われるが、常に現在の社会状況と密接に結びついた形で展開される終わりのない営みであり、継続的な考察と議論を要する。今後も同テーマで検討を続ける報告者の研究はこうした課題について考えるための素地を作るものであり、その点で社会に貢献しているといえるだろう。



写真1:上空から見たソウェト



写真2:高校での授業の様子

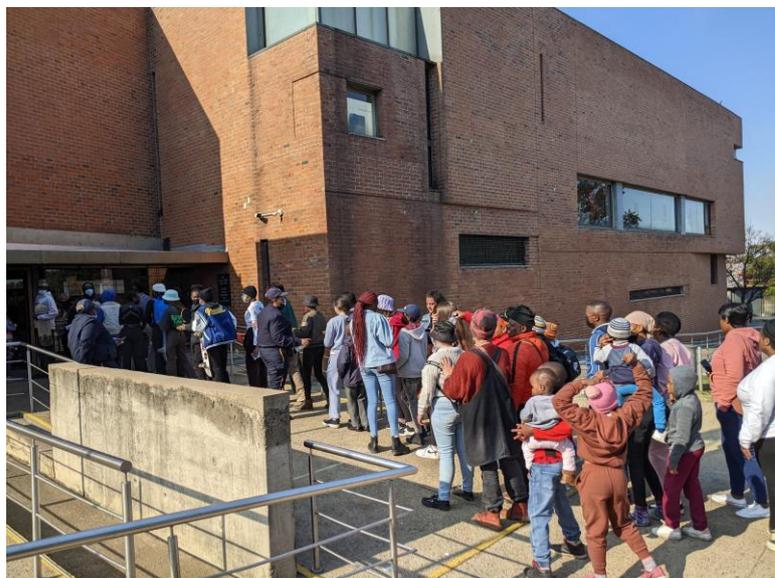


写真3:記念日のヘクター・ピーターソン記念館